

仏教は、インドから中国そして日本に伝わりました。

ところで、インドにも中国にもなく、日本で始められた仏教行事があります。

代表的なものに、春秋二回のお彼岸があります。

「彼岸会」は春分と秋分の日を中日として、前後の三日ずつ計七日の間に行われる法会で、この行事は日本だけに見られるものです。

聖徳太子の頃より始まったともいわれていますが、平安時代初期から朝廷で行われ、江戸時代に年中行事化したといわれています。

また一般の信者はこの間、お寺まいりやお墓まいりをするのが習慣となりました。

私たちの浄土真宗では、蓮如上人までの時代は彼岸会は行われていなかったようですが、上人五十九歳の1473年（文明五年）に吉崎御坊で彼岸会を修したことが『御文』に書かれています。

蓮如上人は、「彼岸の会といえることは、七日のうち中日は、日輪西方にかたむき、彼の浄土の東門に入りたもう。此のゆえに無為涅槃の極樂を彼の岸とはいえり」と述べておられる。

それ以後、今日に至るまで本願寺では絶えることなく、年中行事として七日間、彼岸会の法要が勤められております。

お彼岸とはもともと仏教由来の言葉です。

彼岸とは「かの岸」という意味で、向こう岸のこと。

この彼岸に対する言葉として、「此岸（しがん）」という言葉があります。此岸とは、こちらの岸という意味です。

大きな川を挟んで、自分のいる岸辺を此岸と言い、反対側の向こう岸を彼岸というのです。

さて、彼岸ですが、お浄土を指す言葉です。

お浄土とは、阿弥陀如来のさとりの世界。

「土」という語感から固定的な場所がある様に思えますが、物質的な実体ではありません。

それは如来の願いに叶った世界であり、別名「無量光明土＝全てのいのちがあるがままに光り輝く世界」。

あらゆるものが尊重され、差別や争いのない世界です。

だから「あの世へ行っても、爺さんとケンカしないでよ」と送り出す必要はないのですねー。

そしてお浄土は「私」を照らし出します。

「あなたも光り輝くのちです」と。生きとし生ける全てのものは、その限りなき光明に照らされています。

お浄土が示されなければならなかったのは、お浄土には、ほど遠い此岸があるからでしょう。

『仏説阿弥陀経』には、「五濁悪世」というお言葉が説かれています。

五濁悪世とは、劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁という人間世界を覆う五つの濁り(にごり)を説いたものです。仏様の眼から見れば、この世界は、決して清らかではなく濁りきっているというのです。

劫濁とは、時代そのものが濁っているということです。

その元にあるのが、見濁です。その時代に生きる人々の見解が濁っているのです。自己中心的な見解によって自己も環境も、すべてを濁らせていきます。自分たちさえよかったらよいという考え方が、社会とその時代を濁らせていくのです。

煩惱濁とは、人の行動が濁っているということです。自分に都合のよいものを飽きることなく求め、自分に都合の悪いものを怒りをもって排除しようとする、そのような我欲に染まった誤った行動が、自分も人も環境も破壊していくのです。

このような濁った見解と行動によって、生き物全体が劣化していく状況を衆生濁といいます。

そして、命濁とは、命そのものの尊さを感じ取る心が失われ、命の価値が粗末になっていくことをいうのです。

劫 濁=時代の様相が悪くなる
見 濁=思想・信仰の乱れ
煩惱濁=欲望むき出しの世
衆生濁=人間の質の低下
命 濁=いのちの危機

まさしく、私達が生きる人間社会の状況を、的確に説き表わしているものだといえるでしょう。
此岸は、昔のインドの言葉で「娑婆（シャバ）」と言います。
娑婆とは、「辛抱しなければならない世界」という意味です。

◇予定は立たない

こんなことわざがありましたね。

「来年の事を言えば鬼が笑う」。

仏教ではこの世の中を「縁起」で成り立つと読み解きます。

ここで言う縁起とは、良い・悪いと言う意味ではありません。

この世のすべての出来事は、原因が条件(=縁)によって変化し結果が起こる。

だから「諸行無常(すべてのものは縁起によって時々刻々と変化する)」。

我々には森羅万象を見通す知性などないので、本来予定など立たないのです。

◇それでも我が都合にしがみつく

「鬼が笑う」。その通りだと頷く私ですが、やっぱり予定を立ててしまいます。

それは「自分の都合」そのものです。

人間は自分の都合に固執する癖があります。

◇堪え忍ぶ世界

私たちは「自分の都合」を追い求めて生きています。

「長生きがしたい」「良い生活がしたい」「世間に認められたい」等々。

それは生きる原動力となります。

でも、例えばこの一年のうちで思い通りに事が進んだ日がいったいどれだけあったでしょうか？

小さいお子さんのいるご家庭なら、せっかく作った食事を子どもが食べたがらないとか。

もう出かけないといけないのに、まだ連れ合いが着替え終わっておらず、イライラしてしまったり。

急いでいるのに、信号が赤になったり、バスが目の前で発車してしまったり。

仲間が思ったように動いてくれず、苛立ったりと思った通りにいかないことだらけかもしれません。

こんな言葉があります。

「ままにならぬと おひつを投げりゃ そこらあたりは ままだらけ」

おひつとはご飯を入れておく桶のことですが、ご飯が硬過ぎるとかやわらかすぎるなど、思うままにならないからといっておひつをひっくり返せばどうなるのでしょうか？

当然、そこら中がご飯だらけになってしまいます。

結局、片付けなければならないので余計苦勞するでしょう。

生きていれば、思うようにいかず、すべてを投げ出してひっくり返したい気分になることもあります。

「この世は思い通りにならない」のです

これは昭和 50 年に亡くなった金沢浄秀寺の藤原鉄乗住職の逸話です。

ある時、よくお寺で法話を聴聞していたお婆さんの一人息子が、病気で倒れました。

そして看病に明け暮れたその妻もまた病に。

お婆さんは二人の病人を抱え、孫の世話と一家の家計も支える事となりました。

病気の二人の心配ももつともですが、何よりも人生の予定が大きく変わってしまったことが不満でなりません。

老後はゆっくりとお寺参りを楽しもうと思っていたのに…。

そこで馴染みのお寺の浄秀寺の藤原鉄乗住職に愚痴をこぼしに来たのでした。

「どうしてこんな目にあわなければならないのか」と。
一時間程経ちましたが、愚痴は止まりません。
藤原鉄乗住職はお参りに行く時間となったので、次のように言い放ちました。

「どうしてこんな目にあわんならんのか。」
それはな、お前がこの娑婆へ生まれてきたからじゃ。
わしは葬式があるで出掛けるぞ」。

「何というすげない住職か」と腹を立て帰ったお婆さん。
しかし後ほどお寺へお礼に参りました。「言われる通りやった」と。
良く教えを聴聞してこられた二人ならではのやり取り。
それは「諸行無常」に深く領き、都合にしがみつく私だったという目覚めでした。

諸行無常に深く領いて、そのままの人生をいただかれた方に、小林一茶という方がおいでます。
小林一茶は、多くの俳句を残し、江戸時代を代表する俳人として知られています。
その一茶は、浄土真宗門徒として教えを深く体得していました。彼の俳句には、阿弥陀如来の眼差しが色濃く表れています。例えば有名な句「やれ打つな 蠅が手をすり 足をする」など。
「蠅は打たれて当然」。それは私の都合というモノサシです。
先の句は、生きとし生けるものすべてが尊いという阿弥陀如来の眼差しそのもの。
それを感じながら生きた、念仏者の小林一茶でした。
そんな一茶ですが、決して順調な人生ではありませんでした。
幼い頃に母を亡くし、継母との折り合いが悪かった一茶は、15歳で奉公人として逃げる様に江戸へ。
39歳時父が亡くなり、継母と13年に渡る相続争い。52歳にして結婚するのですが、授かった4人の子ども全員と妻を相次いで亡くしました。
再婚相手との結婚生活は早々に破綻。病の身となり、64歳で3度目の結婚。しかし自宅が火事で焼失。失意の中65歳で亡くなりました。決して理想の人生ではなかったのです。

◇はからいが取られる

ともかくも あなたまかせの 年の暮れ

俳人 小林一茶

この句は「他人任せ」という意味ではありません。
「あなた」とは阿弥陀如来のことです。
そのお心は「そのままのあなたをすくう」。
私が称えるお念仏は、如来の喚び声であると聞かせて戴きます。
思い通りにいかず悲しくて、「何故こんな目に遇わなければならないのか？」と愚痴をこぼさずにおれない現実。
でもそれは、損か得かと善し悪しを判断する私のはからいそのものでした。
その全てがそのままに如来に抱き取られる。
だからこそ、転んだり泣いたりしながらも、一茶という「このままの人生を戴く」ことができたのでした。
「お陰様でここまで生かさせてもらいました。有り難うございました」と。
この娑婆に生まれてきた私。
それは鬼が笑う世界。
予定通り、都合通りに行かない所。
その私を生きてゆくしかなかったのです。

◇現在をふみしめる

「南無阿弥陀仏」のお念仏は「そのままのあなたをすくう」という阿弥陀如来の本願(願いとはたらき)です。それは私の都合を超えてある「今・この・私」を認める温もりとなってくださいます。

過ぎ去った日のことは悔いず、
未だこない未来にはあこがれず、
とりこし苦勞をせず、
現在を大切にふみしめてゆけば、
身も心も健やかになる。
過去は追ってはならない、
未来は待ってはならない。
現在の一瞬だけを、
強く生きねばならない。

ブッダの言葉

上の言葉は阿弥陀如来の本願をこの世に伝えてくださったブッダ(お釈迦様)の言葉です。
それは「予定など立たない、自分の都合を超えた今ここの私を、確かに戴いて歩む」。それが私の命あることの証であることをお示しくさせていただきます。

浄土真宗は冥福を祈らない

「ご冥福をお祈りします」

この言葉はお葬式などの場面でよく耳にする言葉ですよ。

ところが皆さまご存知でしょうか。

なんと、浄土真宗では「ご冥福をお祈りします」という言葉は使わないのです。

先に断っておくと、「ご冥福をお祈りします」という言葉・表現自体が間違っているわけではありませんし、この言葉を使ったからといって、相手に失礼になるとか、そういうことは一切ありません。

ではなぜ浄土真宗が冥福を祈らないのか、そこのところをうかがってみたいと思います。

まず、「冥福を祈る」とは「冥土での幸福を祈る」という意味です。

冥土というのはあの世のこと、死後の世界を意味しますが、その冥土の「冥」という字を漢字辞典で調べてみますと「くらいところ」という意味があるようです。

そして土という字は仏教では「世界」を意味しますので、冥土というのは「暗い世界」、もっと言えば、「どうなってしまうか分からない世界」のことを意味します。

つまり「冥福を祈る」とは、どうなってしまうか分からない世界に旅立たれた故人に対して、どうか幸せになってくれよと祈ることです。

けれど、浄土真宗というのは浄土に生まれていく教えです。

阿弥陀さまは全ての命をかならず浄土に生まれさせるとお立ち上がりくださった仏さまです。

その阿弥陀さまの手によって私たちの命は冥土ではなくて、浄土に生まれていく命であったと聞かせていただくのです。

じゃあ浄土って何？

「帰命無量寿如来～」ではじまる正信偈には浄土は「無量光明土」とであると表されます。

これは「量ることのできない光明の世界」という意味です。

先ほど、冥土とは暗い世界だと言いましたが、浄土はそうではなくて、限りない光の世界なのです。

これは一切の苦悩から離れた悟りの世界であることを意味します。

また、浄土は阿弥陀経に「極楽」と表されます。

極楽と聞くとどんな世界をイメージするのでしょうか。

見たこともないようなご馳走やお酒が山ほどあって食べ放題、飲み放題(時間無制限)、体重も血糖値も尿酸値もコレステロールも何も気にしなくていい。

好きなことが好きなだけで嫌なことは何もしなくてもいい…みたいな世界を私は想像していましたが、どうやらそうではなさそうなんです。

阿弥陀経に、極楽は「苦しみがなく、ただ楽だけがある世界」と示されています。

私たちが思い描く「楽」というのはほとんどが「苦」と背中合わせです。

オリンピック2連覇を果たした体操の内村航平選手が、あるインタビューで「金メダルを獲ってからが地獄でした」と語っておられたのが印象に残っています。

私たちの願望が叶うことが本当の意味で楽なのかということではなく、それは新たな苦をもたらすものでもあるのです。

苦の延長線上に見出した楽というのは、結局苦から離れてはいないのです。

楽を求めて、苦に突き進んでいく生き方しかできないのが私たちであり、だからこそ救わねばならないと立ち上がられたのが阿弥陀さまなのです。

その阿弥陀さまの国、極楽には、そもそも苦しみがないと説かれます。

苦しみがなく、ただ楽だけがある世界。

苦しみがないんだからもはやそれを楽と呼ぶ必要さえもない、ただただ安心の世界とも言えるのかも知れません。

大きな大きな安心の中にいたなら、何も必要ないのです。

それはもはや、幸福を祈る必要さえもない世界であったと聞かせていただくのです。

マラソンで、ゴールした人に向かって「健闘を祈る」と言うのでしょうか。

「健闘を祈る」とは、これからスタートする人、一着になるか最下位になるか、はたまた最後まで走れるかどうか分からない人、健闘を祈る必要がある人に向けての言葉であるはずですが。

まさに冥土とは、幸福を祈る必要がある世界なのです。

ところが浄土は命の終着点、ゴールです。

本当の楽が何たるかも分からずずっと苦楽の狭間を永遠の過去より迷い続けてきた命が、やっと還るべきところに還って往かれた、その方に対して幸福を祈る必要があるのでしょうか。

その別れは悲しいけれど、寂しいけれど、「お疲れさま。よく頑張ったね」と送り出していける世界が浄土なのです。

最初のテーマに戻りますが、なぜ浄土真宗で「ご冥福をお祈りします」という言葉を使わないのか。

それは、私たちは冥土ではなく、浄土に生まれて往くんだ。

そしてその浄土というのは、幸福を祈る必要もない安心の世界なんだと聞かせていただくからです。

冥福を祈る必要がないのが浄土なのです。

じゃあ「ご冥福をお祈りします」と言わないなら、何とさえいいんだ、と気になるところですが、その前にもう一つ、阿弥陀経にある大切なお言葉を紹介せねばなりません。

それは「俱会一处」、「また会える」という言葉です。

阿弥陀さまは「必ず救う」という仏さまです。

「必ず」とは100パーセントです。100パーセントだから、「また会える」と聞かせていただけるのです。

もし阿弥陀さまが99.9パーセント救いますという仏さまだったら、「また会える……かもね」になってしまいます。

阿弥陀経で「また会える」と言い切ってくださったのは、阿弥陀さまの浄土だからこそなのです。

では「ご冥福をお祈りします」と言わずに何とさえいいか。

例えば

「お悔やみ申しあげます」

「哀悼の意を表します」

「またお浄土でお会いしましょう」

など、間柄によってお考えになられてもいいと思います。

堪忍土

私たちが生きているこの此岸は、またの名を堪忍土といます。

此岸とは、昔のインドの言葉で「娑婆」ですが、仏教はインドから中国に伝わりましたので、娑婆という言葉が中国では堪忍土と言われるようになりました。

堪忍とは「堪忍して〜!」の堪忍ですから、耐え忍ぶこと。土とは世界を表します。

つまり堪忍土とは、耐え難い苦しみに耐えていかねばならない世界、ということです。

私たちの日々の暮らしの有り様は、楽を求め、苦しみや悲しみが無くなること、減らしていくことを願いながら右往左往しているところはないでしょうか。

でも、そりゃそうですよね。

誰も苦しみたくなんてないし、悲しい思いなんて一度たりともしたくありません。

それでも厳しい現実突然、容赦なく降りかかってきて、「なんで私が…」「なんであの人が…」と泣いていかねばなりません。

どんな宗教に頼ってみても、何にすがってみても、この世から苦しみや悲しみがなくなることはない、それを堪忍土というのです。

実は、これは、浄土を知った人にしか言えないことです。

人類で初めて宇宙から地球を見たガガーリンだからこそ「地球は青かった」と言えたように、浄土を知ったお釈迦さまだからこそ、この世は堪忍土であったと言えるのです。

浄土を知らない私たちは、今生きている世界が堪忍土であるということも分からず、またそれを受け入れることも出来ずに生きているのでしょ。

いのち終えたなら浄土に生まれていくことを願いなさいと言われても、浄土を見たこともないし、あるのかないのかも分からない私にはとても難しいことです。

でも、お経にはとんでもないことが説かれてあります。

私が浄土を願うのではなく、私が浄土に願われている、というのです。

阿弥陀さまは「あなた一人を救えないようなら、私は仏にはならない」と誓ってくださった仏さまです。

それは浄土も同じで、この私が浄土に生まれていかなかったならば、もはやそれは浄土ではないのです。

この私一人が欠けたならば、阿弥陀さまも浄土も全て崩れていってしまうのです。

私が阿弥陀さまを信じるのではなく、阿弥陀さまが私を信じていてくださるのです。

その阿弥陀さまの大いなる願いがはたらきとなって私の元に届けられていた、それが「南無阿弥陀仏」のお念仏です。

堪忍土に生きる私たちにとって、苦しみ、悲しみを縁として、この大いなる願いに遇っていくことで堪忍土の意味合いが変えられていく、というのです。

そのことを教えてくださる、『私のかわりに』と題された手紙を紹介させていただきます。

『私のかわりに』

もう私が守ることができないから、どうかこの子が道端で泣いていたら、大丈夫だよと声をかけてやってください。

どうかこの子が独りぼっちで公園にいたら、一緒に砂山をつくってやってください。

どうかこの子が運動会でかけっこをしたら、頑張ったねと抱きしめてやってください。

そしてこの子が参観日に淋しそうに後ろを振り向いたら、手を振ってウインクをしてあげてください。

そして中学にあがった日には、満開の桜を背景に写真をとってやってください。

そして反抗期には、何をしてもいい、人に迷惑だけはかけるんじゃない、体だけは大切にしなさいと伝えてください。

いずれ社会に出て色々な壁とぶつかったとき、下だけは向くな、人のせいにするなど伝えてください。

そして心から好きな人が現れたら、求めずに与えなさい、と。

そしてどうかこの子の結婚式の日には、たくさんの笑顔で祝ってあげて…

それからどうかこの子が母親になって涙しながら我が子を抱き、絶えることない強い愛を知ったとき、あなたの母は変わることなくその愛を今もあなたに注いでいると伝えてください。

それから最後に、どうかこの子に

私は世界一幸せな母親だったと伝えてください。

どうかどうか世界中の皆様、私のかわりにお願ひします。

私のかわりに。

これは余命3ヶ月と宣告された30歳のお母さんが1歳の娘さんを思っ書かれた手紙だそうです。

この娘さんがこの手紙をいつ、どのように受け止められたのかは分かりません。

あくまで想像ですが、この娘さんが幼少期、思春期、孤独を感じなかったかと言えば、きっとそんなことはないと思います。

折に触れて「どうして私にはお母さんがいないの」と、埋めることの出来ない寂しさに嗚咽しながら過ごされたかもしれません。

けれども、この手紙に込められた計り知れないお母さんの愛に触れた時、その愛は生死を超えて、今も、過去も、そしてこれからも、ずっと自分に注がれていることを知った時、どうだったでしょうか。

孤独の苦しみが深ければ深いほど、途方もないお母さんの愛の深さを知るのではないのでしょうか。

それはきっと、孤独であった日々で頷きを与える強烈なものであったに違いありません。

遇うべきものに遇ったなら、孤独であった事実は変わらないけれど、孤独であった日々の意味合いが変えられていくのです。

この手紙は一貫して「生死を超えて、あなたを愛している」ということが書かれています、私たちがいただいているお経様も一貫して「生死を超えて、あなたを愛している」と説いてくださったお経です。

生死を超えた愛が今まぎれもなく私の元に「南無阿弥陀仏」と届いてくださっているのです。

この世が堪忍土であるという事実は変わらないけれど、南無阿弥陀仏に込められた途方もなく深い愛がこの私一人に注がれていたと知らされていくところに、堪忍土の意味合いが全く違うものに変えられていくのです。

人生を生きていく中で、心が折れてしまうこともある、挫けてしまうこともあります。

そんな時、阿弥陀さまや浄土におられる大切な方々は「頑張れ」とは言いません。

「ただあなたを愛している」と言ってくれるのです。

この度のお彼岸は改めて「南無阿弥陀仏」とお念仏を申しながら、阿弥陀さまと浄土におられる方々の愛に出会うご縁にさせていただきたいと思います。

『阿弥陀さまっているの？浄土ってあるの？』

阿弥陀さまって本当にいるんだろうか？

浄土って本当にあるんだろうか？

「有る」のか、はたまた「無い」のか。

私も含めて、科学に取り憑かれた現代人の多くが気になるところではないでしょうか。

その点において仏教は、「あるのでもなく、ないのでもない」という一見訳の分からない返答をしています。

「あるのでもなく、ないのでもない」

そう言われると、どっちやねん！と言いたくなってきましたが、そこには深い理由があるのです。

これは「あるのかないのか分かりません」と言っているのではなくて、「ある」か「ない」かにこだわることは無意味なことですよ、と言っているのです。

面白いと思いませんか。なんか宗教って、「あると思いなさい」と強要されるようなイメージがありますが、仏教は違うんです。

万有引力の法則に置き換えて考えると分かりやすいと思います。

万有引力というのは、ニュートンがりんごの木からりんごが落ちるのを見て「なぜりんごは必ず下に落ちるんだろう」と疑問を抱いたことがきっかけで発見された法則です。

今ではもはや常識として誰もが知っていることです。

さて、皆さんは万有引力の法則が本当に「ある」のか「ない」のかを真剣に考えたことはありますか。私はありません。(ないんかい)

なぜなら「ある」にこだわろうと、「ない」にこだわろうと、私を引っ張る力が私にはたらいっていることに変わりはないからです。

「ある」と信じた人にだけ万有引力がはたらいて、「ない」と思っている人は宙に浮いているなんてことははないですね。

私たちが信じようと信じまいと、万有引力は誰にも平等にはたらいっているのです。
そのはたらきを受けたならば、「ある」とか「ない」とかに用事がなくなるのです。
それと同じで、阿弥陀さまや浄土が「ある」とこだわろうと、「ない」とこだわろうと、「あなたを必ず救う」という阿弥陀さまのはたらきは誰にも平等に届いています。
それが南無阿弥陀仏の一声のお念仏なのです。
ところが、そう簡単にこだわりを捨てられないのが私たちです。
自分がなぜ生まれてきたのか、生きるとは何なのか、死んだらどうなるのか、本当のところ私たちは何も分からないし、そんなこと誰も教えてくれない。
人間として一番大事であるはずのことが何も解決されていないまま、学校や仕事、育児や家事など、日々の生活に明け暮れているのが私たちの有り様ではないでしょうか。
それでも死は刻一刻と確実に迫ってきている。
そんなどうすることもできない不安をごまかすために、「阿弥陀さまはいるし、浄土はあるんだ！」とか「阿弥陀さまも浄土もない。死んだらおしまい！」というような「自分はこうだ」という芯を持つことで安心していたいというのが私たちの有り様かもしれません。
でもそれは結局「ある」「ない」という考え方に縛られていて、何の解決にもなっていません。

親鸞聖人は「阿弥陀さまの光にひとたび触れたならば、有無を離れる（正信偈・和讃）」と表現されました。

「ある」とか「ない」ということに必死でしがみついて離そうとしなかった者が阿弥陀さまのはたらきに出遇ったならば、「ある」とか「ない」ということに用事がなくなってしまうとおっしゃったのです。

「ある」とか「ない」とかに用事がなくなる、
有無を離れるとはそういうことではないかと思うのです。
「ある」とか「ない」とか、そういう自分の計らいなどはるかに超えたものに出遇った時、自分の計らいがいかに無意味であったかに気付かされるのです。
「どんなことがあろうとあなたを必ず救う」と、生死を貫いて命の底から私を支えるはたらきが南無阿弥陀仏です。

「ある」とか「ない」に縛られてがんじがらめになっている我が身をそのまままるごと包み込んでくださる途方もない温もりに対して「南無阿弥陀仏」と呼ぶ、もはやそこに「ある」とか「ない」というこだわりは何の意味も持たないのです。

親鸞聖人は晩年、唯円という若い弟子に対してこんなことを話されています。
「たとえ師匠の法然聖人に騙されて、念仏して地獄に落ちたとしても私は何の後悔もありません。（歎異抄）」

浄土があるともないとも、地獄があるともないとも、もはや親鸞聖人にとってそんなことに用事はなく、ただ今「なまんだぶつ、なまんだぶつ」と、生死を超えて今この身このまを包み込んでくださるはたらきが念仏となって我が口から出てくださる、そのことを喜ばれたのです。

この時の親鸞聖人の顔はきっと、なんの力みもない柔らかい柔らかい顔であったことでしょう。もともと「彼岸」とは季節を表す言葉ではなく、「お浄土」を表す仏教用語であります。

生命を始めとして全てに限りがあり、苦悩に満ちたこの現実の世界の「此岸」から、阿弥陀如来のはかりない無量のいのち（寿）と智慧につらぬかれた永遠の安楽国土である「彼岸」のお浄土を渴仰し、いのち終わればそこに生まれることを願うのが彼岸会の本来の意味であります。

私たちはお彼岸を迎えるにあたり、お浄土に想いを寄せ、阿弥陀如来に救いとられていった多くの念仏者やご先祖をしのび、お念仏の人生の確かさ、頼もしさを改めて味わいたいものであります。

「暑さ寒さも彼岸まで」といわれるように、春の彼岸を迎える頃になると厳しかった冬にも別れを告げ、花の咲き競う春が来て、緑さわやかな初夏に向かいます。

秋の彼岸になれば猛暑も収まり、やがて秋も深まっていきます。
四季の変化に富む日本で、この春秋の彼岸の好季節を選んで、仏道修行の時期と定めて仏事が行われていることは、本当に意義の深いことです。